

羽沢珈琲店の長男は廃 ゲーマー

やまたむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

羽沢珈琲店の長男、羽沢いつきはゲーマーだ。それも、ただのゲーマーではない。廃人と呼ばれるゲーマーだった。

これは、廃人ロードをひた走るゲーマーの日常を記した物語。

目次

「廃ゲーマーの夜は長い（プロローグ）」

1

連れ回されるのは男の宿命 ————— 4

いつきに膝枕はいろいろ危険 ————— 13

休日のゲームの後はパンを食べながら休

憩 ————— 26

蘭とホラーゲームは水と油 ————— 43

旅は道連れ財布は嘆く ————— 52

廃ゲーマーの夜は長い（プロローグ）

それは、ある日の夜の出来事だった。

「よしあと、『竜の鉤爪』三つで『竜の籠手』を作ることが出来る」

『うーん。でもさ、そのアイテムの成功率って一%未満で、成功すれば奇跡なんじゃないかってっけ?』

「それは知ってるんだよ。なぜか、巻物関連の効果が乗らない、超ド級の製造系のレアアイテムとかいう訳の分からない地位を獲得した手甲だけど、だからこそ入手したいんだよ」

『えー、あこ、もう疲れたよー。それに、ここのドラゴン系モンスターは、もう見たくないよー』

「頼む、あこ。もう少しなんだ。もう少しで必要なアイテムが揃うんだ」

『わかったよ。とりあえず、りんりんにも狩り延長する事、伝えとくね』

「サンキュー、あこ。愛してるぞ」

『はいはい。そう言うことは気楽に言わない。あこじゃなきや勘違いしちゃうから』
「りよーかい」

見事な連携を見せている少年、羽沢はざわいつきと、少女宇田川うだがわあこはスマホの通話モードを、スピーカーフォンに変えて話していた。

『あ、りんりん、OKだって』

「みたいだな。こつちも、今、確認した」

『そつか。でき、いっくん』

「なんだ？」

『あこ、眠いんだけど？』

「そつか。それじゃ、もう一時間がんばろうな？」

『眠いんだけど!?!』

「叫べる元気があるなら大丈夫だな。後一時間半、頑張ろう」

『もう、いい。つぐちに言いつける』

「すみません！ー！けど後三十……いや十五分だけ手伝ってください」

『それくらいなら』

いつきは睡魔と戦っているあこに、むち打つように指示をだしたが、姉の羽沢つぐみに、夜更かししていることを言いつけると言われ、すぐに手のひらを返す。いつきにとって、つぐみとは逆らうことの出来ない存在なのだ。

ただ、彼がつぐみに逆らおうともしないのは、偏にシスコンと呼ばれる者だからに他

ならない。もし、彼がつぐみに反抗的な態度をとっても、それはかまってほしいというアピールをしているだけだ。決して逆らおうとはしていない。

それから、結局数時間の時が過ぎ、通話口からあの寝息がノイズ混じりに聞こえてきて、寝落ちしたのがわかり、いつきは通話をきり、ゲームの世界のフレンドから「りんりん」という名前のプレイヤーが落ちていないことを確認すると、チャットにて声をかけるが、反応が返ってこないことから、こちらも寝落ちか、狩りに集中しているのだと予想を立て、再び素材集めを再会した。

そして、それは、姉のつぐみが発生して叱りにくるまでの三時間前の出来事だった。

連れ回されるのは男の宿命

―眠い

少年、羽沢いつきはそんなことを考えながら授業を受けていた。

「―で、あるからして、ここはこういう風になる。わかったか？それじゃ、ここの問題を、そうだな……羽沢。答えろ」

「我が名いつき！羽沢珈琲店の長男にして、ゲームをこよなく愛するもの！我が知恵を求めるものよ、我と契約しー」

「ふざけている暇があるなら、さっさと問題を解け」

「ふっ、我と契約を果たさずして、私の知恵を借り受けようなどー」

「ご家族に連絡を入れるぞ」

「すんません。すぐ解きます」

クスクスと笑う声を聞きながら、いつきは問題を解いていく。

「終わりましたよ」

「ああ、正解だ。本当なんで、こいつはこうなんだ」

「いやあ、それが俺の実力って事で」

「ほう、テスト中に眠って毎回0点とることが実力なのか」

「そうそう。仕方ないことですよ。学校は眠るためにあるんですから」

「……勉強するところだからな。ほら、席に戻りなさい」

へいへーい、と気怠そうに返すと、いつきは席に戻り腕を枕にして惰眠をむさぼり始める。

「はあ、優秀なのになんで、こうなんだ。こいつは……」

「せんせー！そんなことより授業続けてください」

そんなこんなで、時はたち、昼休み。いつきは配膳された給食に手を着けることなくぐっすりと眠ったままだった。

「おーい、今日の羽沢当番誰だ？」

「あ、わたしだ。誰か変わってくんない？」

「先生としては、そんな当番が決まっていることが悲しいぞ。気持ちは分かるけどな」

「言い出しつpegがなに言ってるんすか」

「ハハハ、そうだな。それじゃ、羽沢にノート写させとけよ」

「はーい」

このやりとりは、生徒と教師のやりとりなのだろうか？

だが、そのことを気にする生徒はいなかった。

なぜなら、この私立羽丘中学校は、クラス替えが存在せず、よつぼどの事がない限り担任も変わらないのだ。それ故に、毎日のように惰眠をむさぼっているいつきに、ノートを写させる当番が出来たのだ。それも日替わりで。

だが、この効果は非常に大きく、誰かのためにノートをとると言うことは、必要以上に気をつかうため、字がきれいになり、自然と読みやすいノートが完成し、後々見返す時の復習に役立つていたりする。

結果、クラス全体の成績が上がリ、教師も生徒もそして惰眠をむさぼるだけのいつきにも、益のあるものへと進化してしまっていたのだ。

「ほら、起きな、羽沢」

「ん？ううん。あと三匹」

「なに言ってるの。さっさとしないと昼休み終わるよ」

「別に構わん」

「わたし、あんたのせいで居残りさせられるのは勘弁なだけど？」

「ん」

いつきはむくりと起きあがると、人間業とは思えない速度でノートを写していく。

摩擦熱でノートが燃えないのか心配なレベルである。

「毎回思ってたけど、あんたのそれ、人間やめてるよね？」

「いやだな。これぐらい普通だろ」

「いや、絶対違うと思う」

「そうなのか？あ、ノート、サンキュー」

「別に、当番だからやってやってるんだし」

「はいはい、テンプレートなツンデレ乙ー。リアルじゃ需要無いから、そのまま永久に心の奥底にしまっと思ってくれ」

「あんたねえ……！」

「すまん。寝起きだから少し機嫌が悪いんだ」

それは、授業中に寝ていたいつきが悪い。謂われのない罵倒を受けた、クラスメイトの少女Aさんは怒りの余り顔を真っ赤に染めている。

決してこれはツンデレがどうかではない。リアルに、ガチでキレているのだ。

だが、すぐさまフォローになっているのかわからないが、怒らせた自覚のあるいつきは謝るも、寝起きのためか全く持って心がこもっていない。

オブラートに包んで言ったとしても、クズ野郎である。

そんなやりとりがありながらも、一日の授業は全て終わった。

怒りを覚えながら、一回も殴っていないクラスメイトの女子Aさんとい、青木さんにクラス一のクズ野郎、羽沢いつきは、心の奥では感謝している。表に出して感謝しろ

クズ野郎とでも言っておこう。

「家まで送って貰わなくてもよかったですんだけど……?」

「なに言ってるの、あんたの学校での態度を、家族の人に伝えるために行ってるんだから、ついて行かないと、わたしがわかんないじゃない」

「すぐに回れ右して帰ってくんない?」

「残念だけど、わたしの家、こっちの方なのよ」

「どうぞ、さっさと帰ってくださいませ」

「その変な敬語やめてくんない? 腹立つ」

子供のケンカみたいなやりとりをする二人は、端から見ると痴話喧嘩をしているようだった。

「いつ……くん?」

「ん? あ、ひま姉」

唐突に声をかけられ、いつきと青山（青木）は後ろを振り返る。

そこには、わなわなと震えているピンク色の髪の少女、上原ひまりがいた。

「い、いつくんが、あのいつくんに」

「俺が、なに?」

「彼女ができたあああああ!!」

「なに言ってるの!？」

「だって、あのいっくんだよ!?! 私たち以外の女の子といっさい接点のないいっくんが女の子と一緒にいるんだよ!?! これはもう彼女しか考えられないよ!!」

「ひま姉は取りあえずその少女マンガのような思考をどうにかしようか!!」

「いや、その前にわたしとあんたが付き合ってるってどこを訂正しろよ!!」

そんな三人のやりとりを、後方で眺める四つの陰はひそひそと声を殺して話していた。

「なあ、ほんとにあの二人付き合っていないと思うか?」

「少なくとも私はいっくんに彼女はいないと思う。っていうか、私が認めないよ。面接してないもん」

「つぐぐ?」

「どうしたの、モカちゃん?」

「ううん。何でもない。ただ、つぐも相当めんどくさいな〜って思っただけ」

「そう? 普通じゃないかな? 巴ちゃんもそう思うでしょ?」

「ああ、私もあこに彼氏が出来たなんて聞いたら……うん、面接しないとな。あこにふさわしいかあたしが見定めないと」

「巴まで……」

それは、姉バカが炸裂しただけの会話だった。

世界はシスコンとブラコンで満ちているのか……そんな疑問が浮かび上がってきそうな具合だ。

「あ、姉ちゃん。とも姉と蘭姉？モカ姉までなにしてんの？」

「お姉ちゃん、いつくんにはまだ、恋愛は早いと思うの」

いきなりなんだ？と疑問を抱くいつきに、掻い摘まんで事情を説明する蘭。

「こんな感じでつぐが暴走してるから、いつき、とめてくれない？」

「暴走特急状態の姉ちゃんを、俺が止めれるわけ無いだろ？」

「あんたの姉でしょ？何とかしてよ」

「それを言うなら、蘭姉だって姉ちゃんのバンドメンバーじゃん」

「はいはい、蘭もいつくんもそんな不毛な争いしないでさ、止めることだけに意識向けようよ。ひーちゃんをつぐのケンカー」

「はあ？」

モカの一言によりつぐみの方に意識を向けると、そこにはなぜか、言い争っているつぐみとひまりの姿があった。

そして、そこにはすでに当事者だったはずの、いつきのクラスメイトの少女Aこと青木（青木）はいなかった。

「あつ、あいついつの間……。まあ、さっさと帰ってほしかったからいいけど」

「いっくん、女の子は繊細なんだよ！ちゃんと送ってあげないとだめじゃん！」

「そうだよ、いっくん！女の子を蔑ろにするのはよくないよ！」

「あー、もう！何でこうなるかなあ!!」

そんな混沌としたまとめ役不在の状況は、羽沢珈琲店……つまり、つぐみといつきの家につくまで続いた。

そして、そこにつくと、見覚えのある紫色の髪をツインテールにした女の子、宇田川あこがそこにいた。

「あー!! やつと帰ってきた!!」

「あこ!?! 何でおまえがここに!?!」

「ほら！早く行くよ!! りんりんも待ってるんだから！」

「ちよつ、おま、待て、待てつて！えっ？なに？なんか用事あったっけ？」

「もしかして昨日のこともう忘れたの？」

「昨日……?」

あこに問われ、昨日のことをうつすらと思いつく。

「あつ、言ってたわ。俺、昨日夜遅くまでゲームに付きあわせたから、なんか好きなもの買うって、あこたちと約束してたわ」

「思い出した？それじゃ、行くよ。あつ！お姉ちゃん!!」

「よっ、あこ。いつきの財布空っぽにする勢いで奢って貰えよ」

「うん!!」

「いや、ちよつと、それひどくないですかねえ宇田川姉妹!」

そんなこんなでいつきは一日中あことりりんというゲーマーに財布がからになるまで奢らされ、小遣い稼ぎのために実家の珈琲店の手伝い、また夜遅くまであことりりんを引き連れNeoFantasyOnlineをプレイし、また奢らされるといいう無限ループ（笑）を繰り返していたそうだ。

いつきに膝枕はいろいろ危険

休日のいつきは平日よりも酷い。

どう酷いのかというと、朝は起きず、夜も寝ず、昼に三時間だけ寝る、という不健康な生活を送っている。

第二次成長真っ只中の少年が、こんな不健康な生活を送っているせいか、背が伸びることもなく今なお百五十センチ前半という低身長なのだ。

そして、その低身長が彼の悩みでもあるのだが、解決したいならその不健康そのものの生活を改めろと言わせていただきたい。

当然のことだが、つぐみたちも注意はしている。だが、いつきは聞き入れることはない。

なぜなら、

「ゲリラが夜に来るのが悪い！」

という、なんともまあアホらしい理由で、俺は悪くねえ！と言っているからだ。

まあ、夜にゲリラが来なくても、平日の昼間にくるとわかつている場合は、学校をサボろうとするので既に末期といって差し支えない。

こんなことなら、ゲームを与えるんじゃないやなかったと、後悔する羽沢一家が目には浮かぶ。さて、そんなこんなで、ある春の日の休日だ。

いつきはいつも通り、不健康な生活を送り、ゲームをしようとしたときにある現象に襲われた。

「熱い。だるい。頭痛い。ゲームしたい」

「ゲームはだめだからね？」

そう、不健康な生活が祟り、風邪を引いてしまったのだ。

自業自得といえはそこまでなのだが、やはり家族としてなのか心配したつぐみが、店の手伝いを切り上げ、いつきの看病へと移った。

「うー、別にいいじゃ、コホツコホツゲホツおえー」

「そんな状態でゲームなんてやったら、余計に悪くなるからね。今日はお姉ちゃんが一緒にいてあげるから、ちゃんと休もう？」

「せっかくの……休日なのに、ケホツコホツ」

「はい、ゲームしようとしな。今日、スマホはお姉ちゃんが預かっておきます。って、あれ？」

いつきのスマホを没収したつぐみは、電話が掛けられていることに気がついた。

だが、十五年いつきの姉をやっているだけあり、アプリを開こうとしたら間違えて電

話帳を開きそのまま気づかず、電話をかけていたのではと予想を立てる。

いつきの様子から察するに、相当頭が回っていないのだろう。

『もしもし、いつくん？いつくんから掛けてくるなんて珍しいよね？どうしたの？』

「あ、ひまりちゃん？ごめんね、いつくんが間違えて掛けちゃったみたいで……」

『あれ？なんで、つぐが？』

「それなんだけど、いつくんが風邪引いちゃったみたいで……。ゲームしようとしてたから没収したんだけど、ひまりちゃんに電話かけてたみたいなんだ」

『そうなの!?わかった！すぐ行くね！』

「えっ！それはさすがに悪いよ。いつくんの自業自得みたいなのところもあるんだし」

『そうじゃないの、つぐ』

と、一瞬ひまりの声がまじめになり、

『これはいつくんからのSOSだと思おうの』

バカみたいな事を言い出した。

少女マンガを理想にしちやっている、頭が緩い子は運命的と勘違いしている。

そう、これは完全にいつきがうつかりしていただけだ。

いつも電話帳のアイコン付近にゲームのアイコンをセットしていた結果気づかずひまりに電話をかけていただけなのだ。決してひまりに助けてほしかったわけではない。

むしろ来られる方が困ると言うものだ。

いつきは姉と二人きりの状態を風邪ながら楽しみたいだけなのだ。ひまりがきてこの幸せな空間を壊されたくないのが、いつきの偽らざる本音だ。

と、まあ、いつきの本心はどうでもいいので置いておくとして、ひまりとつぐみだが、ひまりが羽沢家へと来ることでまとまった。

なぜなら、つぐみはもともと、休日と言うこともあいまって、店の手伝いをする予定だったのにも関わらず、いつきの看病をしていた。もちろんいつきのことは心配だったが、店の方もちゃんと回っているのか心配なのである。いくらバイトの人がいるとはいえ、心配なものは心配なのだ。そのため、いつきに付きつきりになるのは少し避けたかった。

そして、つぐみはひまりが家に着くまでいつきの看病をして、ひまりが到着次第、店の手伝いへと戻ることになった。

『それじゃ、つぐ、また後でね』

「うん。ひまりちゃんも、いつくんの事お願いね」

『まっかせつなさーい』

いつきはこの瞬間絶望した。

なぜなら、つぐみが自分のスマホを持って、店の手伝いに戻ることが確定したからで

ある。

目も頭もちゃんと機能してないはずなのに、こんな馬鹿げた事に関してはよく頭が回っているといえるだろう。

「それじゃあ、いつくん。ひまりちゃんが来るまで、ちゃんと寝てること。いいね？」

「うん、それはケホツいいけど。なんで、俺は……手をベッドに拘束されてる……の？ コホツコホツ」

「わからない？」

その微笑みをみていつきは確信した。

「まさか、」

確信したが故に絶望した。

「俺にゲームをやらせないためだけに!?!コホツコホツ」

「そうだよ」

馬鹿げた内容だが、真実なだけにいつきの心は抉られた。

そう、馬鹿げた内容のくせにダメージをいつきは負っているのだ。

この姉弟、二人してバカなのか？といたいところだが、この対応をしていないと、いつきは本気でパソコンへと転びながら近づき、残りを作業するかのようになり、処理していき、風邪を悪化させるだろう。

そして、それを予想できないつぐみではない。そのことを封じるため、つぐみは心を鬼にして、いつきをベッドへと縛り付けたのだ。

つぐみから狂気を感じるかもしれないが、こうでもしないと、いつきはゲームをするためだけに、風邪のことをガン無視して行動するのだ。おそらく放置すると事情を説明せずあこを召集し、あこにNFOの周回をやらせようとする。実際過去に似たようなことをしてかして、あこの目を死んだ魚のようなものにして、巴を怒らせたことがあった。少なくとも、人間のクズだと言うことは、間違いないだろう。

そうこうしているうちに、ひまりが到着したようで、ドアが控えめに開かれる。

「い、いつくん？寝てるー？」

「いや……起きてる……少ししんどいけど」

「そうなんだ……。って、寝てなきやだめでしょ!？」

「そういうなら、俺のゲームを代わりに……」

「そういうのもダメ。ちゃんと寝なきや」

「姉ちゃんみたいな事言うなあ……。あ、そうだ」

「なに？ゲームとかは無理だよ？」

「俺のスマホとって？」

そう言われ、ひまりは部屋を見回すが、スマホらしき物は見当たらない。

それもそのはずで、つぐみがいつきのスマホを持って店の手伝いに言ったからだ。当然そのこともいつきはちゃんと理解していたはずだ。なのに、それを忘れていたという事は、つい数分前の出来事でさえ忘れるほど熱があるのだと言うことがわかる。

そこまで、悪いなら深夜帯にゲームをせずつすり眠ればいいものを……。

そんなこんなで、ひまりはベッドの下にあるR—18本を見なかったことにしつつ、スマホがなかったことを報告する。

「スマホ、どこにもないよ?」

「えっ、嘘……。まさか、え、ええー……。コホツコホツ」

「あー、もう、いつくん、無理するから。しょうがないなあ。って、なにこれ!」

「姉ちゃんに拘束された」

「つぐが……。まあ、でも、いつくんも無理しようとするからだよ?今、外してあげるからおとなしくしててよ?」

「うーい……」

ひまりによつて腕の拘束はなくなったが、ひまりの監視があるため、パソコンを起動するために動くこうにも動けなかった。

「よしよし……と」

「ひ、ひま姉?」

「なーに? いつくん?」

「いや……なにやってんのかなあつて……」

「なにつて、」

ひまりは一息吐いた後、少し顔を赤く染め、

「膝枕だよ?」

と言った。

「恥ずかしい……なら……、やらなきや……いいのに」

いつきはそう言っているが、後頭部に感じる柔らかい感触で顔は真っ赤だ。

そんなうらやまけしからん状態だが、いつきはすぐに目をつむった。

なぜなら、目の前にそびえ立つ立派な双丘が目が付いたからである。やっぱりうらやまけしからん。Afterglowのひまりファンがいたらロケットランチャーでの殺害許可を求めるレベルでうらやましい状況だ。

ひまりのもっちりとした太腿に頭を乗せ、堪能している時点で有罪^{ギルテイ}だろう。もう、さつさと血流しちやいなよ?

そんな、どこからか注がれそうな(我々の)殺意は置いておくとして、いつきはひまりに頭をなでられ気持ちよさそうだ。

「うわっ、もう寝ちゃった。そんなに疲れてるなら夜にゲームしなきやいいのに」

そんなひまりの眩きは既に熟睡モードに入っただけには聞こえていない。

そこにあるのは、いつきの気持ちよさそうな寝顔と、少しとろけたひまりの表情だけだった。

「あつ、そうだ。つぐに自慢しちゃおうと」

膝枕された状態で知らない内にツーショット写真を撮られたいつきが目を覚ますことはなかった。

そして、それを送られた先のつぐみはというと、

「ひまりちゃん……。がんばってね」

と、友達を応援するかのような事を呟いていた。

だが、忘れてはいけない。つぐみは、いつきが恋愛するには早いと思っている。

それは、姉バカでブラコンなつぐみだからというだけではなく、いつきがゲーム以外の面では超絶ピュア（エロ本はOKなもよう）だからであって、悪い女（主に中学生から高校生）に引つかからないか心配だったからだ。

こんなつぐみがいくら幼なじみとは言え、現役JKたるひまりとの恋愛に発展することを望んでいるはずがない。

そう、つまり、つぐみがなにしたいて『がんばれ』といったのか。それは単純明快で、いつきの寝相に関連している。

どのレベルで危険なのかというと、

「えっ、ちよっつ、ちよっつと、いつくん?」

第一段階で、腰に抱きつく。

これは、常に自分の隣にぬいぐるみを置いて眠るといふ、何ともかわいらしいいつきの習性だ。

その際、自身の頭の高さにあるものに抱きつく。

そう、それは、人の腰だ。

そして、ひまりの腰が気に入ったのか、頬摺りまでする始末。

くそっ! うらやまけしからん! 今すぐそこ代われ!! そんな我々の思惑など無視し、いつきは第二段階へと突入する。

「ちよっつ、それは、それはだめだよ。いつくん!」

ひとしきりひまりの腰回りを堪能した後、いつきはその太腿へと顔を埋めた。このとき、眠っていたいつきはいつもは抱きついていてぬいぐるみが全く動かないので、手を離し、埋めたのだ。

くそ、こいつ、殺してもいいんじゃないかな?

このSAN値直送ものの光景を描写しなければならぬのか。

そんなことはさておき、いつきはひまりの太腿を堪能できるだけ堪能すると、再びひ

まりの腰に抱きつく。

これをざっと数時間、いつきが再び上を向き、目を覚ますまで続ける。

こんな行為をいつきは無意識にやっているのだ。

そして、それを理解しているからこそ、つぐみも怒るに怒れない。

さあ、これで、つぐみが何に対して『がんばれ』といったのか理解していただいたことだろう。

そう、つぐみはこの無意識的な変態行為に対して言ったのだ。もう、いつきは抹殺すべき対象へと（我々の中で）決定したことだろう。

「はあ……はあ……はあ……はあ……いつくん。もうらめえ」

ひまりは既に息切れを起こしているきつと、聞く人が聞けばちよつと、エツチイR—18な事をしているように聞こえるかもしれない。

だが、やっているのは、ただの美少女の膝枕だ。

なにもやましいことはない。きつと、蘭が聞けば、「イツキ、クロス」と片言でいい、殺しにかかるところだろう。

なんまんんだあ、なんまんんだあ。

そんなこんなで夕方。いつきは目を覚ました。

ひまりの顔が見えるように頭を上にして、顔面で堪能していた太腿の感触を後頭部で

感じながら、目を覚ました。

「おはよー。ひま姉」

「お、おはよ……」

「ひま姉息切れしてるけどどうしたの？」

「あ、あははあ……なんでもないよ」

「そう？」

「うん。ほんと！なんでもないから！気にしないでよ!？」

——そこまで言われるときになるんだけどなあ。

いつきはそんな事を思いながら、聞くことは諦めた。それは、小学生時代の姉も似たようなことを言っており、そこから無理やり話を聞こうとしたら思いっきりびんたされた経験があったからだ。

察しの良い方は気づいていたことだろう。

そう、いつきはこれと全く同じ事をつぐみにもしていたのである。それも、小学生の時！

あの頃は若かった……。で済む問題ではない。だが、経験してしまった以上忘れようにも忘れられない黒歴史、否トラウマとして刻まれてしまったのだ。

女の子としてこれ以上もない屈辱をいつきに、実の弟に刻まれてしまったのだ。

一応ひまりは高校生で、トラウマにはなっていないものの、少し恥ずかしいから、いつきに膝枕するときは、いつきが眠くないときにしよう。もしそのとき寝てしまったら、そのときはそのときで楽しもう。という、乙女にあるまじき考えを浮かべてしまった。

つまり、ひまりははまってしまったのだ。いつきの甘えるという無意識のセクハラに。

そんなこんなで、いつきの風邪は見事にひまりに移り、そのひまりをいつきがお礼として看病するという、後日談でまとめよう。

だが、最後に一言

いつき、爆発しろ!!

休日のゲームの後はパンを食べながら休憩

いつきが風邪を引いて一週間が立ったある日、いつきはいつも通りNeo Fantasy Onlineを立ち上げ、レベル上げにいそしんでいた。

「今日はりりんさんもあこもないし、モチベがあんねえなあ」

「ほほお、これがいつもいっくんが言っていたMMORPGという奴ですか」

ゲームに集中していたいつきに声を掛ける人がいた。

そう、それはAfterglowのギター担当自称謎の美少女、青葉モカがそこにいた。

「うわっ、モカ姉っ!？」

「やつほ〜いっくん。遊びに来たよ〜」

「あ、そう。それじゃ、姉ちゃんでも誘って遊んできたら?」

「残念ながらその姉ちゃんから頼まれたのだよ〜」

「いやいや、何でまたそんなことに?」

「ひーちゃんが膝枕したから?」

「なんで、モカ姉がそのことを!？」

「ひーちゃんが自慢してきたんだよ」

「なんで、そんなことが自慢になるのき……」

「さあー？あ、でもー、つぐがいつくんが何かしなかったか聞いたら、口ごもってたよ？」

ー寝てた俺、ひま姉になにしたんだ。

と、ますます寝ていたときになにをしたのか気になるいつきだが、このマイペースの権化であるモカに聞いたところではぐらかされるのが落ちなので、無駄な労力を割かない。

「まさかだけど、モカ姉も膝枕するとかいわないよな？」

「おやおやあく、いつくんはもしかしてモカちゃんの膝枕も堪能したいのかな。このむつつりさんめ」

「ち、ちがわい!!……それで、モカ姉、本当のところはなににきたの？」

「およろ。弟がお姉ちゃんを疑うよ」

「ひでえ棒読みつつぷりにつっこみ放棄するわ……。それと、俺はモカ姉の弟じゃねえから。姉ちゃんの弟だから」

「いつくん？それじゃ、姉ってつけて呼ばれてるあたしたちもお姉ちゃんって事になるよ？」

「モカ姉たちは姉貴分だから、本当の姉じゃないから」

なんともまあ、酷い言い分である。これをひまりが聞いたら、「お姉ちゃんとして認識してよー!」とか言い始めるだろう。

ここにるのがモカでよかつたのかもしれない。

「その台詞ひーちゃんに聞かせられないねえ」

「でも事実なんだよなあー」

「そうだよねえ。あたしはそこまでじゃないけど、ひーちゃんはそうじゃないからね」

「なんでひま姉は俺の姉になりたいのかねえ」

「いっくんが可愛いんだと思うよ」

「モカ姉、それ、全くうれしくない」

と、まあ、モカがうまくはぐらかすせいで、いつきは聞きたいことが聞けずにいる。「つて、そうじゃなくて、結局なににきたのさ!?!」

「いっくんてばもう忘れたの。モカちゃんはいっくんを外につれて遊ばしたいのだよ」

「そう言う嘘はいらないから。そもそも、姉ちゃんに頼まれたのも嘘なんだろう?」

「それは、ほんとう。あ、でも、つぐが外に連れて行ってって言ったかも」

「なんで、そこは曖昧なんだよ」

「だって〜いっくんの不健康な生活を改善するために〜モカちゃんは派遣されたのですから〜」

「なんだそれは……。」

いつきはそんなことを思っていたが、先週の風邪の原因をつぐみはいつきの生活習慣にあると睨んでいる。

そのため、いつきに健康的な生活習慣を身につけさせるために、Afterglowのメンバーに相談したのだ。

その結果、巴とひまりが乗り気になり、やる気の無かった蘭とモカが巻き込まれてしまった形で、いつきの生活習慣改造計画が企画された。生活習慣の悪い弟を持ったつぐみがかわいそうだ。

そして、勘違いしてはならないのは、モカが最初からこの計画に乗り気じゃないことだろう。

つまるところ、モカはこの計画を適当にやるつもりなのだ。

「それじゃ〜いっくん、ツイスターゲームでもしよーかー」

「何でまた!?!というか、そもそも、それ二人でできるゲームじゃないでしょ!?!」

「そうだね〜。だから、いっくんだけでやって貰おうということなのだよ〜」

「はあ!?それなら、モカ姉一人でやれば良いじゃん!!」

「おやおやあく。いっくんはモカちゃんにあんな事やこんなことを指示して苦労している姿をニヤニヤ眺めてみたいのかなあく?」

「なっ!ちがつ、そうじゃないし!!」

蘭がよくするようなツンデレ的な言葉回しになったいつきだが、実は少し見てみたかったりする。

先ほど自称美少女といったが、モカは相当な美少女のため、中学三年生の思春期真っ只中で美少女に囲まれているいつきは、ちよつぴり、ほんのちよつぴりだが、そんな美少女が自分に為すすべもなく従う姿は見てみたいものがある。

やはり思春期男子はむつつりなのだろう。

「いっくん、隠し切れてないからね?というかくそんなことしたらつぐが怒るよ?」

「うぐつ。て、別にそういう訳じゃないって言ってんじゃん!!」

「ふふふ、この天才美少女モカちゃんに隠し事が通用すると思わないことだ」

「あー、もう!やればいいんだろ!やれば!!」

いつきはやけになり、ツイスターゲームをやることを決意する。

もし、これをモカやひまり、つぐみたちのような超絶美少女組がやるとなれば全力を

賭して描写しようと思ったが、やるのは身長が低い男っぽさがちよつと薄い、中学三年生の思春期男子だ。そんなダレとく描写はやる気がない。

と、言うわけで、いつきは肩で呼吸を整えていた。

「な、なあ、モカ姉。これ、意味あつたのか？」

「うーんあるんじゃない？ いくつかくん一応運動してるわけだしね」

「うう。モカ姉、外いかね？ 散歩したくなつた」

「もしかして、デートのお誘い？ そういうのはひーちゃんとかあこちゃんに、やった方が良いと思うよ？」

「別に付いてこないならそれでいいよ。山吹ベーカリーで適当にパンを買う予定だっただけだし」

「それを早く言つてよ」

「はいはい。それじゃ、ちよつとモカ姉着替えるからでてつてくれない？」

「はいはい」

そんなこんなで、いつきは着替え終わり、モカと山吹ベーカリーまで散歩するようだ。

その際、つぐみが、「お出かけは許したけど、デートは許さないよ、モカちゃん!!」と文句を言っていたが、どこが違うのかさっぱりだ。

「姉ちゃんそのどこが違うの？」

「違うよ！ニユアンスが！」

「それじゃ説明になつてないよ。でも、今から山吹ベーカーリーに行くのは休憩の為なので、決してデートではないのだよ」

「そう？それならいいんだけど……」

と、つぐみのブラコンっぷりをいつきたちはてきとーに流しながら商店街を目指す。

「ねえ、モカ姉」

「なあに〜いつくん？」

「いや、何で姉ちゃんって、あんな感じなんかなあつて」

「ああ、それ〜？」

「そうそう。こういうのって、なんだかんだ言つてモカ姉の方が聞きやすいから」

「ほうほう、そのころは〜？」

「いや、単純にひま姉たちみたく言いふらしたりはしないだろ？聞かれない限りは。それにひま姉とか姉ちゃんとかだと、ほら、なんか恥ずかしいし」

いつきは普段からちよつと以上に子供っぽいところはあるが、こう言うところは中学生らしく思春期特有の感情が支配しているんだなあ、ということがわかる。

というのも、普段からひまり作のAfterglowのマスクットのぬいぐるみを抱いて寝てたり、クラスメイトから押し付けられたエロ本をテンプレートなベッドの下に

隠したり、その押し付けられたエロ本の内容をちよっぴりみただけで顔を真っ赤にするほどピュアな心の持ち主だったりする、小学校低学年の精神性と中学三年生の精神性が複雑に混ざり合っているというのがわかるからだ。

「そっか。でも〜なんであたしなの〜？別に蘭とかともちんでもよくない〜？」

「ほら、蘭姉はこう言うこと聞いても『別に、どうでもよくない？』とか言いそうだし、とも姉は『いつきが弟だからじゃないか？』とかいって、結局聞きたいこと聞けないと思うし……。そう考えたらモカ姉が一番知りたいたいこと答えてくれるかなあーって」

「ふむふむ、つまりあたしは消去法で選ばれたわけか〜」

消去法で選ばれたことにシヨックを受けたモカだが、さすがはぐらかしスキルEXをもっているだけあって、その雰囲気を一ミリたりとも出していない。

そのことに少し違和感を覚えるいつきだったが、直ぐに頭を切り替え、モカに聞き直す。

そのとき、モカが少し昔を思い出すような仕草をとり、こういった。

「いつくんが覚えてないなら、それでいいんじゃないかな。少なくともあたしはそう思ってるよ〜」

「……………どう言うこと？」

「そのままの意味〜」

はぐらかすことに定評のあるモカに聞いたところで、ちゃんとした答えが返ってくることはなかった。

いつきの覚えていない事情というものがあるのは間違いないが、それを今聞いたところでモカがちゃんと答えるはずもないので、いつきは諦める。

「モカ姉が答える気がないのはわかったよ」

「そんな言い方されるとお姉ちゃん困っちゃうな」

「モカ姉は俺の姉じゃないから」

「およろ、いつくんとはあんなことや、こんなこともした仲なのに」

「変な勘違いされるようなこと言うなよ！ツイスターゲームしただけじゃねえか！」

「いつくんの方が勘違いされること言ってるよ」

「はっ！」

というやりとがあつたが、まあ、どちらも同じような勘違いを引き起こすワードをいつているので、どっちもどっちだろう。少なくともつぐみとひまりが聞いたら「年頃の男女がそんなことしちやいけません!!」と叱つているところだろう。

そして、その会話は近くを通る人に聞かれているので、もの見事にその勘違いが広まった。

まあ、ツイスターゲームはもともと一人でできるようなゲームじゃないし、誰かとも

みくちやになってやるのが前提となるため、そういうた勘違いが起きてもおかしくはない。

だが、実態はいつきがモカの指示するマスに手足を置いていくだけのダレとくゲームだ。そう、本当に男が困っているところを描写しても、女の子がセツトじゃないと面白みに欠ける。

言うなれば、シロップの掛けられていないかき氷並みに需要がない。

と、まあ、そんな大人の事情はおいておき、モカとの山吹ベーカリーへ向かっているいつきだが、だいぶ息が整ってきた。

そして、目的地が目の前に現れたモカは目を輝かせ、いつきはそんなモカをみて、どこにそんな興奮する要素があるのかわからないでいた。

「ねえ、モカ姉」

「なあにく？」

「いや、なんで、山吹ベーカリーについてただでそんな興奮してんのかなあって」

「そんなの決まってるじゃくん。この外からでもわかるパンの香り、今日のパンはいつも以上においしいよ〜」

「いや、なんでにおいだけで？」

いつきとモカはそんな会話をしながら店内に入る。

「いらつしやいませー」

山吹ベーカーリーの看板娘、山吹沙綾やまぶきさあやが二人の入店を歓迎する。

「モカにいつき？珍しい組み合わせだね？」

「ふっふっふ。今日はいっくんがモカちゃんにパンを奢ってくれみたいなので、奢られに来たのだよ」

「はあ!?俺、自分の分だけ買いくる予定だったんだけど!？」

「て、いつてるけど？」

「そ、そんなあ。いっくんが奢ってくれると思つて財布持つてきてないよ。ポイントカードは持つてきたけど」

「なんでだよ……」

と、いつきは思った。というより、誰もが思った。

それは、言わずもがな、モカが最初から奢られる気でいたことだろう。そして、奢られる癖にポイントカードだけは持つてきていることもそう思わせる要因の一つといえる。

「あ、モカ姉。なんでもかんでもとつてくるなよ。金払うのモカ姉じゃなくて俺なんだから。それに、ここが経営難になりかねないし」

なんだかんだで奢るあたり、いつきは甘いといえるだろう。

そして、その言葉を受けたモカは「さすがいつくくでも」といって、「モカちゃんもくさすがにそんな非常識な事はしないよ」と続けた。

それに対していつきは、というとき

「と、言ってますけど本当のところはどうなんですか？沙綾さん」

「うーん。二十個近く買っていくからなあ、私的にはグレーかな？」

沙綾とひそひそと話していた。

「そんなあ。こんなに沢山の美味しいパンがあるのにその中から数個だけ選ぶなんてモカちゃんには無理だよ」

「うーん、この反応は嬉しいんだけど、やっぱりほかのお客さんの事もあるからね。なんとも言えないかなあ」

沙綾の気持ちがかかるあたりいつきも一応商売というものが何なのか理解し始めたと言っているところだろう。

露天の存在するMMORPGだと需要によって一つのアイテムにかかる値段が相当高かったりするのだ。なんでも、ドロップするから気にしなくても良いという理論は存在しない。

そういう点ではいつきはゲームに鍛えられているのか下手するとモカが山吹ベーカー

リーのパンをいつきの財布分奢らせる事を察したことにより、それを回避する。

「まあ、いつくんの財布は二週間前にあちんに空っぽにされてるからねえ。そんなに多く買う訳じゃないから安心してね。」

「多く買う訳じゃないっていつて、『これでも少なくともした方だよ』っていうのはなしだからね？一桁で押さえてよ？」

「善処しよ。」

「それ、だめな奴だ。」

「そんなことないよ。ちゃんといつくんの分も含めてモカちゃんが選んであげるんだからねえ。」

そうモカはいつているが、後に「ねえねえおなかいつぱいになった？食べれそうにないならモカちゃんが食べてしんぜよ。」と言い、いつきからパンを横取りするつもりだ。

そして、それをわかっていないいつきではない。

いつきは、「自分で選ぶから、モカ姉はモカ姉の好きなもの選らんできなよ。一桁以内でだけど」といつて、トングを持ち欲しいパンを物色し始める。

ちよつと、姉弟つぱいやりとりを期待していたモカは落ち込んでいるが、その様子は欠片も感じさせない。

「さくて、いっくんはなにを選んだのかな〜」

そう言つてモカはいつきのトレーを覗き込む。

「いや、別に確認しなくても……」

「ふむふむ。クリームパンとアンパンとカレーパンか。王道に行くねえ。それにこれはアニメ意識でくんだのかなあ〜」

「外見からじゃ検討付かないはずなのになんで当ててるんだよ……」

「いやいや。カレーパンは見た目でわかるし、臭いも強いからねえ。すぐ気づいたよ。ま、他は勘なんだけどねえ〜」

「女の勘怖え〜」

「あはは〜」

いつきとモカのコントに沙綾は苦笑しか出なかった。

といつてもモカはどうか知らないがいつきは、至つて真面目にコメントしたので、なぜ沙綾が苦笑したのかわかっていない。

いつきの人誑しとまではいかないものの、それなりに面倒を見てあげたいと思わせる人柄は、学校や地域で思いつきり発揮されており、クラスで羽沢当番なるものが発足されても、ぶつぶつ言いながらもかまわせるそれは、天性のものだといえるだろう。

さて、結局なにがしたいのかというと、この姉という概念の象徴ともいえるキング

オブ姉である沙綾はいつきのそう言った性質に思いつきり影響され、時々商店街に顔を
出されると面倒を見てしまっているのだ。

そして、その都度いつきの頭をなでたい衝動に駆られ、顔に出さないように必死にこ
らえながら、手を頭の方に動かさないうよう必死に耐えながら、いつきにかまっている。

これは余談だが、その衝動に耐え切った後、沙綾の妹である沙南と弟である純を徹底
的に撫で回し、衝動を発散していたりする。

それは、現在進行形でも言えることで、見事なまでに顔に出していないが、甘やかせ
たいチキンレースは始まり掛けている。

そう、まだ始まっていない。

それは、いつきが沙綾と言葉をあまり交わしていないから。

だから、今、沙綾は冷静さを保っている。きつと、いつきがレジに並んだとき、それ
が沙綾にとっての戦闘の合図だといえる。

「モカ姉は決まった？」

「決まったよ。今日もチョココロネなかったけど」

「ごめんねー、うちのチョココロネは結構人気ですぐなくなっちゃうの。今度来たとき
にとっておくこともできるけど？」

「それじゃ、お願いします。モカ姉もそれでいいよね？」

「うん、いいよ。沙綾、おねが〜い」

「りよ〜かい。またのお越しをお待ちしてま〜す」

沙綾はなんとか衝動を抑えることに成功してみたようだ。

そして、その帰り道、いつきはモカに頭をなでられていた。

「モカ姉なんで俺はなでられてるの？」

「いっくんがモカちゃんのために動いてくれたのが嬉しかったんだよ〜」

よしよしと撫でられているいつきは恥ずかしくて顔を赤くしているが、その手を振り払おうとしていない。

また、モカが素直に自分の感情を伝えたことが珍しく目を丸くしていた。

「それに〜いっくんは頭を撫でられるの好きだもんねえ〜」

「う、うるさいなあ！別に良いだろ、頭撫でられると安心するんだから」

「いっくんってそういうところは子供っぽいやねえ〜」

「うう〜……」

いつきはモカにそういわれ、いじけてしまう。

それでもやはりモカの手を払う事はしない。それどころか気持ちよさそうに目を細めるくらいだ。

周りから見れば髪の色は違うがまるで小学生と高校生の姉弟のようにみえるだろう。

「そう言えば、いつくんってあたしの手だけは振り払わないよね。」

「モカ姉のはなんて言うか、いろんな意味で安心できるんだよ。」

「とうとう?」

「ほら、ひま姉みたいに人をだめにする撫で方じゃないし、姉ちゃんは……恥ずかしいし、蘭姉はそもそも撫でないし、とも姉はちよつとがさつだから……そういう意味ではモカ姉が一番なんだよ。」

「このこの、ういやつめ。」

「えっ、ちよつ、待って。」

いつきの抗議を無視しモカはムギューと抱きしめる。いつものモカらしくない行動にいつきは困惑し、ちよつと真面目に死を覚悟する。

こんな幸福を味わいすぎて誰かの嫉妬で殺されないだろうか……、と。

その光景を周囲の人はどのように見ていたのだろうか？

微笑ましい姉弟の様子に見える者もいれば、はたまた足りない何かを補おうとしているようにも見えるだろう。

だからこそ、そこから感じる虚しさというものを感じ取る者はいなかった。

蘭とホラーゲームは水と油

次の週やってきたのは蘭だった。

「ねえ、蘭姉。蘭姉やる気ないって聞いてたけど、何できたの？」

「あ、うん。だから、新曲の歌詞考えさせて貰う」

「うん。で、なんで、家にきたの？」

「同じところにいるより考えやすいから？」

「なんで、そこで疑問形になるのさ……」

いつきは今週の当番は蘭姉なのか……と思いつながら、自分のベッドの上でノートを広げ、ゴロゴロと揺れている蘭をちらちらと見ながら話しかけていた。

「いつき、なんか面白い話して」

「なんで、蘭姉はきて早々そんな無茶振りするの？」

「なんとなく？」

「んな、アホな……」

いつきは蘭の回答にそう呟いた。

蘭のなんとなく、思いついたから、面白い話でもして歌詞のネタ提供してよ、という

無茶ぶりに振り回されるいつき。

このときいつきは思いついた。

(今春だけど、怖い話したら蘭姉怖がるんじゃないかね?)

と。

確かに今の季節は春だ。どう考えてもホラーには早い。早すぎると言っても過言ではないくらいに早い。

だが、それくらいのはかいつきに持ちネタはない。

それと、同時に先週に引き続き唐突にやってきた者への仕返しがあったのである。

そして、イツキは知っている。蘭がお化けとか怖い話とかそういったオカルトが苦手であることを。

因みにモカ以外の Afterglow のメンバーは大体オカルト系が苦手である。

「蘭姉。(蘭姉にとつて)面白くない内容だと思うけど、それでいい?」

「別に、なんでもいい」

「そう?それなら、ネットゲにまつわる怖い話なんだけど?」

「やめて」

「(わい)」

「やめて。ほんと、マジでやめて」

知らない人が居るわけじゃないので、ここで見栄を張る必要はない。まあ、それは、いつきだからこそ、見栄を張らない。というか、張る意味がない。

というのも。

「ごめんごめん、冗談だよ。冗談。まさか、NFOのハロウィンイベであんなに泣くとは思わなかったからさ」

「泣いてない!!」

「はいはい。蘭姉は泣いてないよね。目に涙がたまっちゃっただけだよね」

「うっさい!」

蘭をいじるいつきは珍しく生き生きしている。

わかりやすく言うなら、レイドをソロ攻略しているときに感じるワクワク感である。

本来、いつきはSっ気たつぷりの少年なのだ。そのことを覆い隠すほど、いつきの弟スキルが高いだけで。

「そういえば蘭姉。来たとき店の状況どうだった? 忙しそうなら手伝いに行こうと思うんだけど」

「大丈夫じゃない? お店にいたのあたしただけだったし」

「それは、店として大丈夫なのだろうか……?」

大丈夫な訳ないだろう。

人がいないことは自営業の飲食店において、最悪といえる。

人生山あり谷ありとも言うのだし、こういう日が一日くらいあっても問題ないが、やはりお小遣いを貰う中学生の身としては、もっと収益があがってほしいと言うもの。

もっと、お客さんこないかなあと思うも、なにもしようとしなさい、ただの廃ゲーマーがここにいた。

「あ、そうだ。ねえ、蘭姉、ちよつと手伝つてくれない?」

「え?なに?あたし、今忙しいんだけど」

「歌詞考えてるだけでしょ?それなら、刺激とかあれば良いんじゃないかなあと思って
さ」

「まあ、確かにそうだけどさ」

そう言っつていつきは立ち上がると、蘭に先ほどまで座っていたパソコンの前に座るよ
うに促す。

蘭は訝しげな視線をいつきに浴びせるが、いつきが気にした様子はない。

「蘭姉操作は覚えてる?」

「忘れた」

「よし、それじゃあ、まずそこから……」

そして、いつきは蘭の後ろに回り、操作の仕方を教えていく。その際、マウスに添えてある蘭の手に自身の手を重ねたり、その結果、蘭との距離がほぼなく密着状態だったりと、もし、見る人が見れば、いつきが蘭を抱きしめているように見えるだろう。うん、爆発しろ。

ちなみにいつきは何とも思っていない。ひまりの膝枕や、モカに抱きしめられたことと比べると、自分からやってる分、心に余裕があるからだ。

それから何時間経っただろうか。

日も傾きはじめ、夕方にさしかかろうとした時に事件が起きた。

「ね、ねえ。いつき。ほんとに、ここじゃないとだめなの？なんか、BGMも雰囲気にあわせられてて、あんまりやりたくないんだけど」

「だいじよぶだいじよぶ。このあと電気消すから」

「なんで、こつちでも雰囲気だそうとするの！もうやだ。帰りたいたい」

「ホラゲは暗くしてやる方が面白いからね。仕方ないね」

「やだ、なんで、あたしなの。つぐみとかモカとやってよ」

「いやあ、蘭姉が一番言い反応してくれると思ったから、この赤鬼は」

赤鬼。このゲームはフリーゲームで、主人公のあらしが友人たちとある洋館に入り、追ってくる赤鬼と呼ばれるミュータントから逃げ、その洋館から脱出するゲームで

ある。決してあ○鬼じゃない。

「いつき、もう時間も時間だし、帰っていいよね？あたし、もう限界」

涙目になって上目遣いの蘭にすこし、ドキツとするいつきだが、鋼の豆腐メンタルで必死にいつきのいつきが起きあがるのを防ぐ。

いつきは、時間を確認すると、時間が時間だし泊まっていくかと提案する。

それに蘭は「……お願い」と泣きそうな顔で言った。

※※※

「蘭といつくんなにやっているとと思う？」

時間は遡り、昼頃。

蘭を除いたA f t e r g l o wのメンバーは羽沢コーヒー店に集まっていた。つまるところ、いつきはこのメンバーの真上で蘭に赤鬼やNeo Fantasy Onlineをやらせていたことになる。

「うーん。歌詞とか考えてるんじゃないかな？ガル ज्याムに向けて」

「あ、そつか。歌詞とか練習とかの時間考えるとそんなに時間があるわけじゃないもんね」

そこから、買い物に行ったり、雑談したりと時間が経過して夕方にさしかかった頃だろうか、つぐみのスマホにメッセージが送られてきた。

いつくんと書かれているところに入っていることから、いつきから送られてきたことがわかる。それがメッセージ写真の順だったため、開かないとなにが書いてあるのかわからなかった。

「あ、蘭ちゃん泣いちゃったんだ……」

「なんだその状況!?!」

「いつくんが、ホラーゲームやろうって言い出して、蘭ちゃんと一緒にやったんだって。それで……」

「なるほど。去年の再来ミニバージョンになったんだね」

因みに一年前は、モカ以外が涙目でいつきに抱きついたり、全員（いつき除く）で風呂に入ったりした。

その光景はまさしく百合の花が咲きほこり、皆の目を和らげてくれたかもしれないが、一年前の話であること、詳しい描写をすると、必須タグがめんどくさいので、語れない。その光景はあなたの中にある。

「で、それで、どうなったんだ?」

「蘭ちゃん、家に泊まるみたいだよ」

「あ、それじゃあ、私も泊まる!!怖がって蘭が一人でお手洗いにいけないかもしれないしね!」

「それじゃ、あたしもそうするか。モ力は?」

「それじゃあ、あたしも」

なし崩し的に羽沢家に泊まる事が確定した。

というのも、既にいつきが親に話を通しており、それなら、モ力達も泊めても良いんじゃないかな?と言う風にどんどん話が進み、結局のところ羽沢宅でAfterglowメンバーが泊まるかの確認をいつきがしてきたと言う感じだ。

これは、全力をとして、美少女五人組の寝静まった姿を描写すべきところなのだろうが、そんな野暮ったいことはしない。Afterglowのメンバーが寝静まったところをイメージして誰かが描いてくれているはずだ。語るまでもなく尊いのは皆承知しているだろう。

そんなこんなで、翌日、いつきはさんざん蘭をいじめ抜いたお詫びとして、買い物に付き合うことになり、荷物持ちをすることになった。

「ほら、男でしょ?もつとシャキツとして」

「絶対これ、思いついたまま買ってるでしょ。そもそも、蘭姉ってここまで買うような人

種じゃなかったはずだし……」

さて、この光景を見た第三者どう思うだろうか。

仲睦まじい姉弟が買い物をしている光景か？否、恋人同士がデートをしているように見えるだろう。

なんとも仲睦まじい、爆発させたいと思うほど、楽しそうだ。心なしか、いつきの表情も楽しそうに見える。

誰かダイナマイトを持っていないだろうか？私が爆発させてくる、と言う会話があつた気がしたが気のせいだろうかといつきは決めつける。

「ねえ、いつき」

「気のせいだよ、蘭姉。俺はなんにも聞いていないよ。和服の人がダイナマイトを周囲の人を持つていないか尋ねて警察にしょっぱかれていたのなんて見てないから」

蘭はその心当たりのある人物を頭の奥底に追いやり、いつきの語った風貌は気のせいだ。そうじゃなきや華道の家元が警察に捕まるわけがないと思ひ込む。

そうしないと精神を安定させることなんて無理なのだろう。

旅は道連れ財布は嘆く

翌週、いつきは珍しく外出していた。いつきが外出すること事態は、つぐみやひまり、あこなどに無理矢理連れ出されることなので珍しいというわけではない。

だが、この日は違った。なぜなら、いつきが珍しく、つぐみやひまり、あこに連れられず外出しているからだ。

男子からすると羨ましい光景だが、いつきにとつてはそうでもないらしい。

かといって、いつきも男の端くれ、いくら隈がなければつぐみと顔つきは似ているとは言え、男の子なのだ。現役J C、J Kに囲まれると嬉しさもあるが、不安にもなるのだ。主に自分の社会的地位と言うものが。

それ故に、今日くらいはひとりで出かけようと思い、時々親の手伝いで稼いだお小遣い（よく、アコに奢ったりするためすぐなくなる）を使い新作のゲームを買いに行っているのである。それはもう心がピョンピョンするくらいには楽しみにしている。

そして、そのゲームショップについたとき、見覚えのある少女の後ろ姿が目に入った。

「あ、りんりんさん」

いつきが声をかけると、その背中はビクウツと跳ね、周囲を警戒するかのように見渡

している。

その姿が面白く、いつきはホラーゲームをやらせた蘭と同じくらいからかいたい衝動に駆られるが、先週それで（財布が）痛い目を見ていたため、ぐつとこらえた。

「こつちですよ」

「あ、いつくんさん。こんにちは」

「りんりんさん。その『いつくん』って呼ぶなら『さん』はいらないって言ってるじゃないですか……」

「あ、うん。ごめんね。あまり男の人とは関わりがなかったから……」

「ゆっくり慣れていきましようか。今後も男性と関わることもあると思いますし」

「う、うん。ありがとう……い、いつくん」

恥ずかしがる少女にうんうんと頷くいつき。端から見ればカップルのように見えることは間違いなしだ。

それも少女の方が赤面しており、同時にいつきはニヤニヤしているので、少女を辱めているようにも見えなくもない。

「それで、りんりんさんもしかして新作の？」

「……うん。……あこちゃんの方も一緒に買おうかなって」

「あー、なるほど。あこもまだ中学生だからなあ……」

「……いっくんも中学生じゃないですか」

「俺は授業中寝てるんで」

いっくんは決め顔でそう言った。全く持って誇らしいことではないし、授業中ねているから何だというのか。少女、りんりんには分からなかった。

ちなみに二人とも揃って本名を知らない。あこが「りんりんはりりん、いっくんはいっくん」と初対面の時に言ったため、二人して追求するのをやめた。

そもそも、この二人はネットを通じて知り合っているので、本名を尋ねることに少し躊躇いがある。

「……いっくんは、受験生じゃないんですか？」

「ええ。まあ、なるようになるんで大丈夫ですよ。最悪、家を継ぎますし」

「……ゲームばかりしていたら、志望校に落ちるかもしれないですよ？」

「りんりんさん。そこにやりたいゲームがあるのに、諦めろと言うんですか？」

「……ごめんなさい。私が間違えてました」

何を間違えたのか一般人にはさっぱり分からなかった。だが、二人の間にあるゲーム魂的に、りんりんの方が間違えていたらしい。

「……そういえば、あこちゃんの誕生日プレゼント用のアイテム集めは進んでいるんですか？」

「全く進んでないです」

「……その、それじゃあ、手伝いましょうか？」

「いいんですか!!お願いします!!」

「……ネカフエでいいですよね？」

いつきは頭を縦に勢いよく振る。下手すれば首がもげるのではないかと不安になるレベルだが、人体の構造的に自分の力でもげることはないだろう。

いつきたちは欲しいゲームを買い終えると、ネットカフェに向かった。

「……あ、あの。注文とかは、いつくんに任せてもいいですか？」

「ええ、いいですよ。りんりんさんにはこれから頑張ってもらわないといけないんですから」

「……メインはいつくんですからね？」

「わかってますよ。でも、あこの欲しがってるアイテムがまさかの期間限定でしたからね……」

「……ノルマは？」

「フル強化しようと思うので五千くらいでしょうか？」

「……多すぎないですか？」

「リアルラックの問題です……」

りんりんは「あつ……」とだけ言って、それからは無言だった。何かを察したのだろう。

そう、いつきはゲームも含め運に恵まれていない。そのため、ゲーム内のアイテム集めはドロップ率二十パーセントのアイテムでも体感コンマ一未満と言うドロップ率になっってしまう。

当然、そのアイテムの強化にも成功率と言うものがあり、失敗すると再度同じ素材を利用して、強化するという地獄が始まる。

いつきの五千は多すぎではあるが、リアルラック的には少なすぎと言うのがいつきの現在の思考だ。

因みにいつきは十万ほど集めるといふ苦行をするため、これはほんの一部にすぎない。

「……そういえば、いつくんって、あこちゃんのことどう思ってるんですか？」

「いきなりですね……。まあ、仲の良い幼なじみですよ。あいつ、なんだかんだで面倒見がいいですから……」

「信頼してるんですね」

「まあ、幼稚園の頃からの付き合いですし……」

赤面するいつきに少し保護欲の湧くりんりんだが、それを表に出すと、ただの危ない

オタクになりかねないと判断し、心の奥に抑え込んだ。

いつきはそんなりんりんの感情に気づくことなく、ほぼ無心でゲームの素材集めに全力を注ぐ。

時々、りんりんの飲み物を注文したりする事で、ちよつとした休憩をとっていたりする。

「全然貯まんねえ」

「……こればかりは運と試行回数だから、頑張ろう」

「運の段階で詰んだ……」

「……でも、それってゲームに限った話じゃないですか。……常に低乱数の計算だけで良いつて羨ましいです」

「その分命中不安定になりがちなんですよね……九五パーセントは実質ゼロパーセントなんです……」

「……それは、……ま、まあ、MMOだと命中率は関係ないんですから」
「固定値カこそパワーです」

目をドロドロと輝かせるいつきに、りんりんは目をきらきら輝かせて、「そうですそうです」と同意している。

この二人は精神的に似通っている点が複数あるらしい。特にゲームに関しては、完全

に意見が合うようだ。

因みにいつきはタンカーなので、パワーは最低限に抑えられている。

「……やっぱりいつくんがいるとサクサク進みますね。……私とあこちゃんだけだとうしても時間がかかりますから」

「魔法職二人でダンジョンに潜るって周回ぐらいじゃないですか。MMOはパーティバランスを考えなきゃ」

「……そうですね。いつくんがいるからとても助かってます」

下心のない、純粹な回答はいつきの汚れたゲーマー精神にクリティカルヒットした。なお、ゲーマー精神という点においてりんりんも同様である。

「ふう。あと二時間くらい潜れば漸く半分に届きますよ」

「……それじゃあ、私の方で貯まった素材渡しますね」

「ありがとうございます」

いつきの元に添付メールが送られてきて、どれくらい入っているのか期待していると、

一人でやったら達成できなかったノルマだったただけあって、達成感や満足感は半端がなくある。

「りんりんさん。この後暇ですか？」

「……え、あ、はい。暇ですけど、どうかしたんですか？」

「いえ、お礼をさせて欲しいなと思ひまして……」

「そんな……！私は年上ですからいっくんに奢られるのは……」

「気にしないでください。小遣いは普通の家庭よりは貰ってますので」

「……もしかしていっくんってお金持ち？」

「珈琲店の長男です。時々手伝いをしてるので」

「……そうですか。安心しました……」

「あの、もしかして失礼なこと考えませんでした？」

「そ、そそそ、そんなことないですよ。いっくんは綺麗な体のままです」

「やっぱり考えてたんじゃありませんか!!」

りんりんが、なにを考えてたのかわからないいつきはそれだけいつて追求しなかった。りんりんの的には、いつきが大人の女性相手、もしくはヤのつく人たち相手に何かしていたのかと心配していたのだ。

もちろん、いつきはそんなことをしていない。

そして、心外だと頬を膨らませる。

そんないつきに、こういう表情もできるんだと、りんりんは思った。

いつきたちはネットカフェからでると、大型ショッピングモールに向かう。

「……あ、あの、ほんとはよかったですか？」

「え？ああ、はい。いいんですよ。また金が必要になったら手伝いをすればいいんですから」

「……すごい、ですね」

「??？」

りんりんが何にすごいと言っているのかわからず、首を傾げるが、いつきは気にしないことにした。

「そういえば、何を買う気なんですか？」

「……今度のライブで使う衣装の生地です。あこちゃんから聞いてないんですか？」

「えっ、あこバンド組んでたんですか？」

「……そういえば、あこちゃんからいつくんには内緒って言われてたんです……その、忘れてくれますか？」

「無理です。ていうかなんで、俺に知られたくないんだ？今度問いつめてみようかな？」

「……さ、さすがにそれは……」

「ま、あこのことですし、なんとなく秘密にしてたらかっこいいとかそんなところだと思いますけどね」

「そ、そんなことないですよ！あこちゃんもあこちゃんです考えがあるんだと思います！」

いきなり大きな声でそんなことを言われ、いつきは困惑した。ただ、りんりんの目が本気だったことから罪悪感が少し湧いてくる。

「わかつてますよ。あこはどうしようもない程中二病ですけど、考えなしの大バカじゃないですから。それにしても、りんりんさん。あこのことすっかり見てるんですね」

「……えっ、あ、そ、それは……」

今度はいつきりんりんが困惑される番になった。

りんりんが言葉を探しながら目を泳がせていると、りんりんの目がよく知った人物とあつた。

「あつれー、燐子じゃん」

「い、今井さん」

りんりんが話しかけられたことで、いつきもその少女の存在に気づく。

当然、いつきが気づいたという事は、その少女も気づくと言うことで、

「あ、もしかして燐子デート中だった？ごめんね急に話しかけて」

「で、デートっ！ち、違います！いっくんとはゲームを買いに行った時に一緒になっただけで……」

「そのついでにネカフエにも寄りました」

「やっぱりデートじゃん！」

「い、いつくん!？」

突然のフレンドリーファイアにりんりんは目を見開き、いつきの方を向く。いつきはそれそれは、たいそう良い笑顔をしていた。それはもう、怖がって画面を見なくなつてホラーゲームをしていたときの蘭をからかう時と同じくらいには。

りんりんは、いつきの放った一言による誤解を解こうと、必死になり、その様を見ていつきと少女は面白そうにくすくすと笑っていた。

一通り笑うと、少女は本題に入る。

「なるほどなるほど……で、二人はどういう関係なの？」

「……ゆ、友人です」

「ネットゲームで知り合った友人です」

「そうなんだ……あ、そういうえば、自己紹介してなかったよね？あたしは今井リサ。君は？」

「羽沢いつきです。いつもりんりんさんとあこがお世話になってます」

「いつきくんかあ。ん？羽沢？」

「あ、もしかして姉ちゃ、姉のつぐみのことですか？」

「そうそう。うーん。でも、姉弟にしてはあんまり似てないよね。髪はボサボサだし、目にも隈がすごいことになってるし……隈は今じゃどうしようもないけど髪は整えてあ

げようか？」

「結構です」

なぜか、いつきはスラスラと会話ができた。脳と口が直結しているのではないかというレベルでスラスラに。

そんな対コミュ障兵器、今井リサのコミュ力にいつきは圧倒されていた。

「で、いつきくんは燐子のことりんりんって呼んでるけど、どうして？」

「ネット民のマナーみたいなのはですよ。ネットで関わる以上は本名は隠さないといけないですし、りんりんさんも俺のネットネームの方で呼んでますし」

「なるほどねー。じゃあ、燐子と出会ったときのこと聞かせてよ」

「すみません。いまはりんりんさんと買い物中ですので」

「そっか、それじゃあ、今度燐子かあこに聞くね」

そう言うと、リサは自分の買い物に戻っていった。と言っても、やることと言えば目的もなく眺めるだけなので、買い物といえるのかは怪しいところだが。

「今井さん、怖い……」

「……えっ？」

「あんなに普通に個人情報抜き取れるって……」

「あの、それは、いつくんが自分から言ってますでした？」

「あんな風に尋ねられたら、中学生の俺だと何でも答えちゃいますよ……」

「……そ、そうなんですネ」

「くっ、チャットならこうはならないのに」

「そ、そうですね……」

弟がこんなことを言っているのを実は、最初からつけていたつぐみは恥ずかしく思った。

幸いにも、つぐみは蘭や巴とは違い目立つタイプではないため、違和感なく人ごみに紛れている。結果、いつきたちは気づかず会話を続けていた。

「つーぐ。なにしてんの？」

「り、リサ先輩!？」

「いつきくと隣子のデート覗き見してたの？」

「元々はいっくんがゲームを買って返ってくるまで見守ろうと思ってたんですよ……」

「わかっているって。喋っているときにつぐみが見えてたからね。それにしても、あの子小動物みたいで頭なでたくなるよね」

「だ、だめですよ！ いっくんの頭を撫でて良いのは私だけなんですから」

「そ、そっか。あれ？でも……ま、いつか」

そんな会話を後方で繰り返していることを知らない、いつきとりんりんは楽しそうに

デート……もとい、
買い物を楽しんだ。